

有島武郎

小さき者へ





小ぢぢ者へ



お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上った時、——その時までお前たちのパパは生きているかいな  
いか、それは分らない事だが——父の書き残したものを  
繰り広げて見る機会があるだろうと思う。その時この小  
さな書き物もお前たちの眼の前に現われ出るだろう。時  
はどんどん移って行く。お前たちの父なる私がその時お  
前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐ら  
く私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代を噛み憐れんで

いるように、お前たちも私の古臭い心持を嗤い憐れむの  
かも知れない。私はお前たちの為ためにそうあらん事を祈  
っている。お前たちは遠慮えんりよなく私を踏台ふみだいにして、高い遠  
い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。  
然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世  
にいるか、或はいたかという事実は、永久にお前たちに  
必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの書き物を  
読んで、私の思想の未熟で頑固がんこなのを嗤う間にも、私達  
の愛はお前たちを暖め、慰なぐさめ、励はげまし、人生の可能性  
をお前たちの心に味覚させずにおかないと私は思ってい

る。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪うばわれてしまったのだ。お前達の人生はそこで既すでに暗い。この間ある雑誌社が「私の母」という小さな感想かんそうをかけと行って来た時、私は何んの気もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きている事だ」と書いてのけた。而そして私の万年筆がそれを書き終おえるか終えないに、私はすぐお前たちの事を思った。私の心は悪事でも働いたように痛かった。しかも事実は事実だ。

私はその点で幸福だった。お前たちは不幸だ。恢復かいふくの途みちなく不幸だ。不幸なものたちよ。

暁方あけがたの三時からゆるい陣痛じんつうが起り出して不安が家中にひろ拡がったのは今から思うと七年前の事だ。それは吹雪ふぶきも吹雪、北海道ですら、滅多めったにはないひどい吹雪の日だった。市街を離れた川沿いの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子まどガラスに吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲わたがしに閉じられた陽の光を二重に遮かきって、夜の暗さがいつまでも部屋から退どかなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上ははうえは、夢心地ゆめごこちに呻うめき苦



しんだ。私は一人の学生と一人の女中とに手伝われながら、火を起したり、湯を沸かしたり、使を走らせたりした。産婆が雪で真白になってころげこんで来た時は、家中のものが思わずほつと息気をついて安堵したが、昼になっても昼過ぎになっても出産の模様が見えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える気遣いの色が見え出すと、私は全く慌ててしまっていた。書齋に閉じ籠って結果を待っていていられなくなった。私は産室に降りていつて、産婦の両手をいっかかり握る役目をした。陣痛が起る度毎に産婆は叱るように産婦を励まして、一分も早く産

を終らせようとした。然ししか暫らくしばの苦痛の後に、産婦は  
すぐ又深い眠りに落ちてしまった。鼾いびきさえかいて安々と  
何事も忘れたように見えた。産婆も、後からか駆けつけ  
てくれた医者も、顔を見合わして吐息といきをつくばかりだっ  
た。医師は昏睡こんすいが来る度毎に何か非常の手段を用いよう  
かと案じているらしかった。

昼過ぎになると戸外こがいの吹雪は段々しず鎮まっていって、濃  
い雪雲から漏もれる薄日の光が、窓にたまった雪に来てそ  
っと戯たわむれるまでになった。然し産室の中の人々にはま  
すます重い不安の雲が蔽おほい被かぶさった。医師は医師で、産

婆は産婆で、私は私で、銘々めいめいの不安とらに捕とらわれてしまった。

その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵ふちに臨のぞんでいる産婦と胎児たいじだけだった。

二つの生命は昏々こんこんとして死の方へ眠ねって行いった。

丁度ちやうど三時と思わしい時に——産気さんけがついてから十二時

間目に——夕ゆふを催もよおす光の中で、最後と思わしい激しい

陣痛が起おった。肉の眼で恐ろしい夢でも見るように、産

婦はかつと瞼まぶたを開いて、あてどもなく一所いこを睨にらみなが

ら、苦しげというより、恐ろしげに顔をゆがめた。而そし

て私の上体を自分の胸の上にたくし込んで、背中を羽が

いに抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度にいきんで  
 いなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだろうと  
 思う程だった。そこにいる人々の心は思わず総立ちにな  
 った。医師と産婆は場所を忘れたように大きな声で産婦  
 を励ました。

ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔を挙げ  
 て見た。産婆の膝許には血の気のない嬰兒が仰向けに横  
 たえられていた。産婆は毬でもつくようにその胸をはげ  
 しく敲きながら、葡萄酒葡萄酒といっていた。看護婦が  
 それを持って来た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の

中にあけると命じた。激しい芳芬ほうふんと同時に盥たらいの湯は血のような色に変わった。嬰兒えいじはその中に浸ひたされた。暫くしてかすかな産声うぶごえが息気いきもつけない緊張きんちようの沈黙を破って細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那せつなに忽如こつじょとして現われ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほほえんだ。私はそれを見ると何んという事なしに涙が眼がしらに滲にじみ出て来た。それを私はお前たちに何んといっているいい現わすべきかを知らない。私の生命全体が涙を私の眼から搾しぼり

出したとでもいえばいいのか知らん。その時から生活の諸相しよそうが凡すべて眼の前で変ってしまった。

お前たちの中最初にこの世の光を見たものは、このようにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れように難易なんいの差さこそあれ、父と母とに与えた不思議な印象に変わりはない。

こうして若い夫婦はつぎつぎにお前たち三人の親となった。

私はその頃心の中に色々な問題をあり余る程持っていた。而そして始しじ終ゆう齷あく齷せくしながら何一つ自分を「満足」に近

づけるような仕事をしていなかっただ。何事も独りで噛みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活を生活していながら、私の心はややともすると突き上げて来る不安にいらいらさせられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を悪んだ。何故自分の生活の旗色をもっと鮮明にしない中に結婚なぞをしたか。妻のあるために後ろに引きずって行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉欲の結果を天からの賜物のように思わねばならぬのか。家庭の建立に費す労力と精力とを自分は他に用うべきでは

なかつたのか。

私は自分の心の乱れからお前たちの母上をしばしば泣かせたり淋しがらせたりした。またお前たちをも没義道ぎどうに取りあつかった。お前達が少し執念しゅうねく泣いたりいがんたりする声を聞くと、私は何か残酷ごんんぎやくな事をしないではいられなかつた。原稿紙にでも向っていた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持って来たり、お前たちが泣き騒さわいだりしたりすると、私は思わず机をたたいて立上ったりした。而して後ではたまらない淋しさにおそ襲われるのを知りぬいていながら、激しい言葉を遣つかつたり、厳



しい折檻せつかんをお前たちに加えたりした。

然しかし運命が私の我儘わがままと無理解とを罰する時が来た。ど

うしてもお前達を子守まかに任せておけないで、毎晩お前た

ち三人を自分の枕許まくらもとや、左右に臥ふせらして、夜通し一人

を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがったり、

一人に小用こようをさせたりして、碌々ろくろく熟睡する暇いとまもなく愛

の限りを尽つくしたお前たちの母上ははが、四十一度という恐ろ

しい熱を出してどつと床とこについた時の驚きもささる事では

あるが、診察しんさつに来てくれた二人の医師が口を揃そろえて、結核けっかく

の徴候ちようこうがあるといった時には、私は唯ただ訳もなく青くな

ってしまった。検痰けんたんの結果は医師たちの鑑定かんでいを裏書きしてしまった。而そして四つと三つと二つとになるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ体となつてしまった。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に帰った。而そしてお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私わたしがその町に住まい始めた頃働いていた克明こくめいな門徒もんとうの婆ばあさんが病室の世話をしていた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し涙を拭ふいた。お前たちは母上を寢台の上に見つけると飛んで行ってかじり付つこうとした。結核けっかくしやう症である

のをまだあかさされていらないお前たちの母上は、たから宝を抱だきかかえるようにお前たちをその胸に集めようとした。  
 私はいい加減かげんにあしらってお前たちを寢台に近づけないようにしなければならなかった。忠義をしようとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを弁解べんかいしてならない事情に置かれた人の味いそうな心持を幾度も味った。それでも私はもう怒る勇氣はなかった。引きはなすようにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路きろにつく時には、大抵街燈たいていがいとうの光が淡く道路を照していた。玄関を這入ると雇人やといにんだけが留守していた。彼等は二三人もいる癖くせ

に、残しておいた赤坊のおしめを代えようともしなかつた。気持ち悪げに泣き叫ぶ赤坊の股またの下はよくぐいよ濡ぬれになっていた。

お前たちは不思議に他人になつかなない子供たちだった。ようようお前たちを寝かしつけてから私はそつと書齋はに這入はいって調べ物をした。体は疲つかれて頭は興こう奮ふんしていた。仕事をすまして寝つこうとする十一時前後になると、神経の過敏かびんになったお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだった。暁方あけがたになるとお前たちの一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされると私の眼は

もう朝まで閉じなかつた。朝飯を食うと私は赤い眼をし  
ながら、堅い心かたしんのようなものの出来た頭かかを抱えて仕事を  
する所に出懸でかけた。

北国には冬が見る見る逼せまって来た。ある時病院を訪おとず  
れると、お前たちの母上は寝台の上に起きかえって窓の  
外を眺ながめていたが、私の顔を見ると、早く退院たいいんがしたい  
といい出した。窓の外の楓かえでがあんなになつたのを見る  
と心細いというのだ。成なるほど入院したてには燃えるよ  
うに枝を飾かざっていたその葉が一枚も残らず散りつくし  
て、花壇かだんの菊も霜に傷められて、萎しおれる時でもないのに

萎れていた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思った。然し母上の本当の心持はそんな所にはなくって、お前たちから一刻も離れてはいられなくなっていたのだ。

今日はいよいよ退院するという日は、霰あられの降る、寒い風のびゅうびゅうと吹く悪い日だったから、私は思い止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行ってみた。然し病室はからっぽで、例の婆さんが、貰ったものやら、座蒲団ざぶとんやら、茶器やらを部屋の隅でござごと始末していた。急いで家に帰ってみると、お前たちはもう

母上のまわりに集まっただけ嬉しそうに騒いでいた。私はそれをみると涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになってしまっていたのだ。五人の親子はどんどん押し寄せて来る寒さの前に、小さく固まって身を護ろうとする雑草の株のように、互により添って暖みを分ち合おうとしていたのだ。然し北国の寒さは私たち五人の暖みでは間に合わない程寒かった。私は一人の病人と頑是ないお前たちとを労わりながら旅雁のように南を指して遁れなければならなくなつた。

それは初雪のどんどん降りしきる夜の事だった、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上つたのだ。忘れる事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残なごりを惜おしんだ。陰鬱いんうつな津軽海峡つがるかいきょうの海の色も後ろになった。東京までついて来てくれた一人の学生は、お前たちの中が一番小さい者を、母のように終夜しゅうや抱だき通としていてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎とも角かく私たちは幸けに怪我がもなく、二日の物憂ものうい旅の後に晩秋ばんしゅうの東京に着いた。

今までいた所とちがって、東京には沢山の親類や兄弟



がいて、私たちのために深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だったろう。お前たちの母上は程なくK海岸にささやかな貸別荘かしべつそうを借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取って、そこから見舞いに通った。一時は病勢が非常に衰おとろえたように見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘さきゆうに行つて日向ひなたぼっこをして楽しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小康しょうこうを私たちに与えたのかそれは分らない。然し彼はどんな事があつても仕遂しとぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに

迫った頃お前達の母上は仮初の風邪からぐんぐん悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病気の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病児は病児で私を暫らくも手放そうとはしなかつた。お前達の母上からは私の無沙汰を責めて来た。私は遂に倒れた。病児と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の為に呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまった。それでも私はもう私を悔やもうとはしなかつた。お前たちのために最後まで戦おうとする熱

意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えているのみだつた。

しょうがつ

正月早々悲劇の絶頂が到来した。お前たちの母上は

自分の病気の真相を明かされねばならぬ羽目はめになった。

そのむずかしい役目を勤つとめてくれた医師が帰って後の、

お前たちの母上の顔を見た私の記憶きおくは一生涯私いつしやうがいを駆かり

立てるだろう。真蒼まっさおな清々すがすがしい顔をして枕についたまま

母上には冷たい覚悟かくごを微笑びしょうに云わして静かに私を見た。

そこには死に対する resignation と共にお前たちに対する

根強い執着しゆうちやくがまざまざと刻きざまれていた。それは物凄ものすご

くさえあった。私は凄惨せいさんな感じに打たれて思わず眼を伏ふせてしまった。

愈々いよいよH海岸の病院に入院する日が来た。お前たちの母上は全快ぜんかいしない限りは死ぬともお前たちに逢あわない覚悟かくごの臍ほぞを堅かためていた。二度とは着ないと思われる——而そして実際着なかった——晴着を着て座を立った母上は内外の母親の眼の前でさめざめと泣き崩くずれた。女ながらに気性きしょうの勝すぐれて強いお前たちの母上は、私と二人だけいる場合でも泣顔などは見せた事がないといってもいい位だったのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ち

た。その熱い涙はお前たちだけの尊とうとい所有物だ。それは今は乾たいてしまった。大空を互わたる雲の一片となつてい  
るか、谷河たにがわの水の一滴となつてい  
るか、大洋の泡あわの一つ  
となつてい  
るか、又は思いがけない人の涙堂るいどうに貯たくわえら  
れているか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角  
もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のいる所に来ると、お前たちの中熱病ねつびょうの予後よご  
にある一人は、足の立たない為めに下女げじよに背負せおわれて、  
——一人はよちよちと歩いて、——一番末の子は母上を  
苦しめ過ぎるだろうという祖父母たちの心遣こころづかいから連

れて来られなかった——母上を見送りに出て来ていた。  
お前たちの頑是がんぜない、驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられていた。お前たちの母上は淋しくそれを見やっていた。自動車が動き出すとお前達は女中にすす勧められて兵隊のように拳手きよしゆの礼をした。母上は笑って軽く頭を下げていた。お前たちは母上がその瞬間しゆんかんから永久にお前たちを離れてしまうとは思わなかったろう。不幸なもののたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息気いきを引きとるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈はげしい戦がたたか闘わ

れた。母上は死に對して最上の態度を取る為めに、お前  
 たちに最大の愛を遺す<sup>のこ</sup>ために、私を加減なしに理解する  
 為めに、私は母上を病魔<sup>びょうま</sup>から救う為めに、自分に迫<sup>せま</sup>る運  
 命を男らしく肩に担<sup>にな</sup>い上げるために、お前たちは不思議  
 な運命から自分を解放する<sup>きようぐう</sup>ために、身にふさわない境<sup>き</sup>遇  
 の中に自分をはめ込むために、闘った。血まぶれになつ  
 て闘ったといつていい。私も母上もお前たちも幾度<sup>だんがん</sup>弾丸  
 を受け、刀創<sup>とうそう</sup>を受け、倒れ、起き上り、又倒れたろう。  
 お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日  
 に死が殺到<sup>さつとう</sup>した。死が凡<sup>すべ</sup>てを圧倒<sup>あつとう</sup>した。而して死が凡<sup>すべ</sup>て

を救った。

お前たちの母上の遺言書ゆいごんしょの中で一番崇高すうこうな部分はお前たちに与えられた一節だった。若もしこの書き物を読む時があつたら、同時に母上の遺書いしよも読んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに会わない決心をひるがえ翻ひるがえさなかつた。それは病菌をお前たちに伝えるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によって自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷ざんこくな死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びて行



かなければならぬ霊魂れいこんに少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼児ようじに死を知らせる事は無益むえきであるばかりでなく有害ゆうがいだ。葬式そうしきの時は女中をお前たちにつけて楽たのしく一日を過ごさして貰もらいたい。そうお前たちの母上は書いてある。

「子を思う親の心は日の光世より世を照る大きさに似にて」

とも詠えいじている。

母上が亡なくなった時、お前たちは丁度信州しんしゅうの山の上りんじゆうにいた。若もしお前たちの母上の臨終りんじゆうにあわせなかった

ら一生恨みに思うだろうとさえ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上おじうえに強しいて頼たのんで、お前たちを山から帰らせなかつた私をお前たちが残酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草している部屋の隣りにお前たちは枕ならを列べて寝ているのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齡としになったら私のした事を、即ち母上のさせようとした事を価あたい高く見る時が来るだろう。

私はこの間にどんな道を通つて来たろう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道だいどうにさ

まよい出た。私は自分を愛護あいごしてその道を踏み迷まよわずに通って行けばいいのを知るようになった。私は嘗かつて一つの創作の中に妻を犠牲ぎせいにする決心をした一人の男の事を書いた。事実じつじに於てお前たちの母上は私のために犠牲ぎせいになつてくれた。私のように持ち合わせた力の使いようを知らなかつた人間はない。私の周囲あわのものは私を一個の小心ろどんな、魯鈍ろどんな、仕事の出来ない、憐れあわむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底てっぺいさして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就じょうじゆしてくれた。私は自分の弱さに力を感じ

じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を見出した。大胆だいたんになれない所に大胆を見出した。鋭敏えいびんでない所に鋭敏を見出した。言葉を換えていえば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫みぬき、大胆に自分の小心を認め、労役して自分の無能力を体験した。私はこの力を以もつて己おのれを鞭むちうち他を生きる事が出来るように思う。お前たちが私の過去を眺めて見るような事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知って喜んでくれるだろう。

雨などが降りくらしして悒鬱ゆううつな気分が家の中に漲みなぎる日などに、どうかするとお前たちの一人が黙だまって私の書斎

に這入はいって来る。而して一言。パパといったぎりで、私の膝ひざによりかかったまましくしくと泣き出してしまふ。ああ何がお前たちの頑是ない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたちよ。お前たちが謂いわれもない悲しみにくずれるのを見るに増して、この世を淋しく思わせるものはない。またお前たちが元氣よく私に朝の挨拶をしてから、母上の写真の前に駈かけて行って、「ママちゃん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間しゅんかんほど、私の心の底までぐざと刮えぐり通す瞬間はない。私はその時、ぎよつとして無劫むごうの世界を眼前がんぜんに見る。

世の中の人には私の述懐じゅつかいを馬鹿々々しいと思うに違ちがい  
ない。何故なら妻の死とはそこにもここにも厭あきはてる  
程おびただ夥ことごとくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事  
を重大視する程世の中の人には閑散でない。それは確かに  
そうだ。然しかしそれにもかかわらず、私といわず、お前た  
ちも行く行くは母上の死を何物にも代えがたく悲しく  
口惜くちおしいものに思う時が来るのだ。世の中の人が無頓着むとんちやく  
だといってそれを恥はじてはならない。それは恥はずべきこ  
とじゃない。私たちはそのありうちの事柄の中からも人  
生の淋しさに深くぶつかつて見ることが出来る。小さな

ことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生えだ。泣くにつけ、笑うにつけ、面白がるにつけ淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかを、お前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災いである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸ひたっていてはならない。お前たちの母上は亡なくなるまで、金銭の累わずらいからは自由だった。飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食いたい食物は何んでも食う事が出来た。私たちは偶然な社会組織の結果からこんな特権とっけんならざる特権を享きょう楽した。お前たちのあるものはかすかながらU氏一家の模様もようを覚おぼえているだろう。死んだ細君さいくんから結核を伝えられたU氏があの理智的な性情せいじょうを有もちながら、天理教てんりきょうを信じて、その御祈ごき禱とうで病気を癒なおそうとしたその心持を考えると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱が



きくものかそれは知らない。然しU氏は医者しかの薬が飲み  
たかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎  
日下血かけつしながら役所に通つた。ハンケチを巻き通した喉のど  
からは皺しわが噎れた声しか出なかつた。働けば病気が重おもる事  
は知れ切つていた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼  
みにして、老母ろうぼと二人の子供との生活を続けるために、  
勇ましく飽あくまで働いた。而して病気が重つてから、な  
けなしの金を出してして貰つた古賀液こがえきの注射ちゅうしゃは、田舎いなか  
の医師の不注意から静脈を外はずれて、激烈な熱げきれつを引起した。  
而してU氏は無資産むしさんの老母と幼児とを後に残してその為

めに斃たおれてしまった。その人たちは私たちの隣りに住んでいたのだ。何んという運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思い出すと共に、U氏を思い出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋うずめる工夫くふうをしななければならぬ。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで拈ひろげさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世じんせいは淋しい。私たちは唯そういつて澄ましていゝ事が出来るだろうか。お前たちと私とは、血を味つた獣けもののように、愛を味つた。行こう、而して出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救うために働こう。私はお前

たちを愛した。而して永遠えいえんに愛する。それはお前たちから親としての報酬ほうしゅうを受けるためにいうのではない。お前たちを愛する事を教えてくれたお前たちに私の要求ようきゆうするものは、ただ私の感謝を受取って貰もらいたいという事だけだ。お前たちが一人前に育ち上った時、私は死んでいるかも知れない。一生懸命ろうすいに働いているかも知れない。老衰ろうすいして物の役に立たないようにしているかも知れない。然し何れの場合いずにしろ、お前たちの助けなければならぬものではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向おうとする私などに煩わづらわされていてはなら

ない。斃<sup>たお</sup>れた親を喰<sup>く</sup>い尽<sup>つく</sup>して力を貯<sup>たくわ</sup>える獅子<sup>しし</sup>の子のよう  
に、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行  
くがいい。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指している。しんと静まった夜の沈黙<sup>ちんもく</sup>の中にお前たちの平和な寢息だけが幽<sup>かす</sup>かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母<sup>おば</sup>が母上にとて贈<sup>おく</sup>られた薔薇<sup>ばら</sup>の花が写真の前に置かれて  
撮<sup>と</sup>っている。それにつけて思い出すのは私があの写真をも  
ものが母上の胎<sup>はら</sup>に宿<sup>す</sup>っていた。母上は自分でも分<sup>わか</sup>らない

不思議な望みと恐れとで始終心をなやましていた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の真似だといって、部屋の中にいい肖像を飾っていた。その中にはミネルヴァの像や、ゲーテや、クロムウエルや、ナイティンゲール女史やの肖像があった。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で観ていたが、今から思うとただ笑い捨ててしまうことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の写真を撮ってやろうといったら、思う存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入って来た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく

笑って私にいった。産は女の出陣しゅつじんだ。いい子を生むか死ぬか、そのどっちかだ。だから死際しにぎわの装よそおいをしたのだ。——その時も私は心なく笑ってしまった。然しかし、今はそれも笑ってはいられない。

深夜の沈黙は私を厳肅げんしゆくにする。私の前には机へだを隔ててお前たちの母上おとが坐っているようにさえ思う。その母上の愛は遺書にあるようにお前たちを護らずにはいないだろう。よく眠れ。不可思議ふかしぎな時というものの作用にお前たちを打ち任してよく眠れ。そうして明日は昨日よりも大きく賢かしこくなつて、寢床おとの中から跳り出して来い。

私は私の役目をなし遂げる事に全力を尽すだろう。私の一生が如何いかに失敗であろうとも、又私が如何なる誘惑ゆうわくに打負けようとも、お前たちは私の足跡あしあとに不純な何物をも見出し得ないだけの事はする。屹度きつとする。お前たちは私の斃たおれた所から新らしく歩み出さねばならないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばならぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出来るだろう。

小さき者よ。不幸な而そして同時に幸福なお前たちの父と母との祝福しゅくふくを胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は

遠い。而<sup>そ</sup>して暗い。然<sup>しか</sup>し恐れてはならぬ。恐れ<sup>ない</sup>者の  
前に道は開ける。  
行け。勇<sup>いさ</sup>んで。小<sup>い</sup>さき者よ。

(一九一八年一月、新潮所掲)







日本文学電子図書館

---

小さき者へ

著 者：有島武郎

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和43年7月30日 30版

---



日本文学電子図書館